

◆INDEX◆

- ①今年も五ツ又まつりは最高／②ボウリング大会の想定外の効果／③敬老の日の集いの予告
④紙類の収集について来年度変更があります／⑤治兵衛塚その2ー政次の生きざま

① 今年も五ツ又まつりは最高

今年は7月23～24日に開催されました。まだ梅雨明け宣言がされてない時期でしたが、珍しいことに両日も曇りがちで雨はなし。山車・神輿巡行は24日の日曜日にもさほど気温は上がらず、今年の猛暑にくらべるとラッキーな環境でした。

同じ日に、北小の5年生は林間学校が実施されたので、小学生の参加者は少なく、山車は曳き手が20人ほどで、引き綱の先にひとかたまりでしたか、親御さんの力を得ての巡行でした。神輿も2基巡行したものの、地元の担ぎ手は少なく、サッカークラブ ストロングスの協力をいただきました。たしか神輿1基は女子が中心でした。この状況で巡行は見事完了です。

盆踊りに集まっていたのは約2000人、他の自治会開催のまつりに較べて一自治会の開催行事にしては誇っていい人出です。

例年のとおり踊り手の中心は北小ウィングのお母さんたちですが、そのほか老若男女が多く踊ってましたっけ。踊りの列は2回り。川越市長もいつもの通りの参加です。

去年は激しい雨が降ってできなかった彩の会の太鼓演奏も、オープニングと、踊りの中ほどの2度行いました。

2日間幸いにもけが人はほとんどなく無事お開きになりました。めでたしめでたし。お力添えいただいた理事、保存会の皆様ありがとうございました。

まつりは皆さんからの寄付によって開催されています。まつりの予算は今年はおおかた110万円です。今年は椅子・机、花がけ用印刷機材を購入しましたから、少し増額でした。経費のうち自治会の持ち出しは3分の1で、残りは個人の花掛け、浄財箱への喜捨、各区からの寄付でまかっています。これがあるからまつりができるのです。毎度毎度ありがたいことです。来年もぜひご協力のほどお願いいたします。

衆議院議員、県会議員、市会議員、小中学校校長など、先生たちを大勢お招きし、お忙しい中おいでいただいています。これは五ツ又の行事が盛んにおこなわれていることや自治会員の集団活動の意識の高さを来賓にご覧いただき、「五ツ又ここにあり」と地区の印象を来賓の方々に高めていただくためです。きっと五ツ又地区に悪い印象はありません。まつりにはそういう目的もあります。決して利益誘導ではありませんから。



2 ボウリング大会の想定外の効果

ボウリング大会は6月11日（土）、ふじみ野市のイーグルボウルで開催されました。参加人数は例年に較べ少ない32名でしたが、今年も熱い戦いが繰り広げられました。

結果は次の通りです。優勝は金子寛子さん（397p）（写真右）、準優勝は新井正司さん（391p）、3位は福田玲子さん（369p）、名誉のBB賞は根本裕志さん。

会費1000円で3時間ほどを過ごせます。これがまず第1のお得。同じ町に住んでいるのですが会うことが少ない、知らない顔の中に身を浸すのはちょっと怖いなんて思いませんか。怖がってはいけません。お互いのボウリングのプレイに歓声を上げているうちに、この人はこんな人



だったんだと見直すいい機会なのです。お付き合いが始まるきっかけになるかもしれません。次にどこかで出会った時には、自然に、笑顔と時候の挨拶、さらにお互いの健康を気遣う言葉掛けができたりします。これが第2のお得。

来年もやります。梅雨で気分が盛り上がらない時期の開催です。重いボールでピン列を破壊するのは、気分がいいです。



3 敬老の日の集いの予告

今年の敬老の日の集いは、9月19日（祝）ジョイフルで開催されます。今年は五ツ又親和会創立40周年を記念して、五ツ又自治会と五ツ又親和会の共催となります。

前半、大ホールで演じられるのは「無伴奏男声コーラス（グリーン）」と「エイサー」のふたつ。男性コーラスの調和と、エイサーの迫力をお楽しみください。

エイサーは沖縄の仏教のお盆の行事です。江戸時代初め、今の福島県の浄土宗のお坊さんが、沖縄で布教活動をしたことで上層階級に念仏がひろまり、お盆に先祖供養の風習が始まりました。形式としては門付け唄や念仏歌を歌い、踊るということだったようですが、明治時代に入ると念仏の詠唱を若者が担い、現在のエイサーの形をとるようになったということです。沖縄の熱気がムンムン伝わってくるような。

開場は10時で、午前中の第1部は参加者にホールでの演奏会鑑賞、午後からの第2部は70歳以上の申込者対象の食事会となります。第1部は何も制限がありませんから、どなたでもご覧いただけます。老若男女お誘いの上おいください。第2部は各区理事に参加お申し込みの上、当日ホール前の受付でお手続きください。



（写真は昨年度のものです）

4 紙類の収集について来年度変更があります



五ツ又自治会は年間8回の集団資源回収を実施しています。このほかに高階中学校主催の資源回収が年4回あります。これを合計すると12回になり、つまり五ツ又地区内で毎月1回集団資源回収が実施されていることになります。

これ以外に毎月1回、市の紙類回収作業が行われているのはご存じですか。集団資源回収実施は地区の任意ですから実施していない自治会が

あります。その地域では市が集める紙類回収を利用するほかありませんが、五ツ又自治会では年間24回の紙資源回収が行われていることになります。

集団資源回収と市の紙類回収との違いは何でしょう。

市の紙ごみ回収は市の業務です。回収を市指定の回収業者に依頼し、その経費は市の経費から出します。最終収集場所は鯨井のつばさ館です。

集団資源回収は主催者が回収業者を選定し、当日回収地点を自ら管理します。集めた紙類は回収業者に販売します。回収業者はグループ内の工場で処理します。主催者の手にする販売額は回収業者の負担する回収経費を差し引きますからそんなに高額ではありません。周回してくる回収業者に20kgほどの新聞を売ってもトイレットペーパー1巻ぐらいですから想像はつきます。

集団資源回収主催者のうまみは集めた資源の重量に応じて市から集団資源回収主催者に集団回収事業報償金が支払われることです。その対価はアルミ缶・段ボール・新聞紙・雑紙いずれも1kg当たり6円です。安いようですが、五ツ又の場合この報償金と業者への販売価格で年間60万円になります。

なぜ市が報償金を支払えるのかというと後処理を含めた集団資源回収事業に市が人的・経費的に関与していないからです。集団資源回収を介して資源に対して市民がリサイクルの意識を高めるのもひとつのメリットでしょうが、業務のひとつを地元住民に任せることで市の経費が抑えられます。

年度初めに市から冊子「川越市家庭ごみの分け方・出し方」が配布されますが、その中の回収コース欄を見てみましょう。コース14,16,31,57,58などの7コースで紙類の欄に「自治会の集団回収をご利用ください」の一文があります。「市の回収はありません」の意味です。誤解を招くといけませんので、明確に言いますと市が一方向的にやらないと言っているのではありません。その地区からの自主的申し入れにもとづいています。

紙資源の量は回収回数に応じて増えるものではありません。ある限定された回収量を市と地区とが分け合っただけです。それに対して市は二重の経費をかけてきたことになります。もとは税金です。五ツ又地区も今まで市に対して二重の負担を強いてきたことになります。

そこで、五ツ又自治会役員会から「市の回収を中止するよう市に申し入れる」件が発議され、8月の理事会において、理事の承認をいただきました。

今年度はすでに市の回収実施日が決められていますので、回収中止実施は来年度からです。34コースは紙類回収はなくなります。18区など29コースに含まれる地区は確定し次第ご連絡します。また会員外の皆様には、今年度内に連絡を徹底いたします。

以上皆様のご理解とご協力をいただきたくお知らせ申し上げます。

五ツ又自治会だよりのバックナンバーは五ツ又自治会ホームページでカラーでご覧いただけます。

五ツ又自治会ホームページは <http://www.itutumata.jp/> あるいは「五ツ又」で検索下さい。

井戸端の友
あいさつ代わりの
話のネタ

治兵衛塚（吉田神社）の続きです。前号では「次兵衛」と書きましたが、「治兵衛」と書く書物もあって、こちらが正しいようなので今回から表記を変えます。

吉田神社に祀られている吉田氏の名前は吉田治兵衛政次と言います。治兵衛は官職名のようなのです。政次は関西の出身です。武将、蒲生氏郷に仕え大坂夏の陣では西方の兵士として戦功がありました。主君蒲生氏の

本拠地は近江ですが、氏郷は秀吉傘下で各地を転戦し多くの戦功を挙げ、秀吉の信任を得て、今の福島県会津も開発しました。吉田氏も彼に伴って動いていたと思われ、関東地方に縁ができたのでしょう、後に関東に来て酒井家に仕えました。しかし、酒井家は左遷されたため吉田氏は失職し、酒井氏の力の及んだ川越に来て、時の領主松平信綱に仕えることになりました。彼が川越藩で得た役は「物頭（ものがしら）」です。物頭は普通足軽大将とも言います。仕事は足軽8人から10人ほどを統率することです。身分的には武士の中に入ります。ちなみに一心太助に出てくる大久保彦左衛門は長柄の足軽大将でした。

足軽は弓・鉄砲・長柄（2間の長さの槍）を武具とする武士階級に入らない兵士です。これらの武具は武士としてはいまわしい卑怯な武具であり、武士はプライド上使ってはならないものです。武士は1対1で果し合うのが正当な戦い方です。大人数が寄ってたかって遠方から長い槍でつついたり、鉄砲で弾を飛ばすような戦法は武士のものではありません。この実践的戦法をとるのは足軽です。

吉田氏も足軽から始まったのでしょう。それが蒲生氏に付き各地を転戦している間に、日々の戦闘から戦闘技術を磨き上げ、相当な武人になったのであろうと推測されます。そういう力があつたからこそ反徳川勢力であつた過去を持ちながら徳川方に取り入れられたのだと思います。

さて吉田政次の所領地は砂新田でした。記録によると領民に慕われていた存在だったと言います。彼の収入は知行200石でした。知行地の収穫量が200石とされると彼の手に入る年収は四公六民で4割の80石となります。現在の価値にすると500万円ぐらいであつたと言われます。

こういう現実的な存在として生きていたはずの吉田氏には悲劇のおとぎ話めいた話がまわりついています。申し子で得た女兒を失い自殺まで考えたというのですが、彼の子孫は静岡の領主へ転職したといわれ、昭和には東京台東区に居た子孫が例年祭を催した話もあり、決して家は断絶しなかったのです。

川越の昔話に登場する吉田政次の話を要約すると、子がなく榛名神社の神に頼んで申し子をいただいた。しかしその娘は七歳になると奇行が始まる。草履が濡れていることがある。事情を確認すると毎夜神のもとに帰っているのだという。そこである日政次は女兒と下女をつれ榛名山に行き、神に地位保全の願をかけた。ところが下女は突然狂い湖に飛び込み蟹になる。娘は大蛇になっていた。

仕方なく政次は我が家に戻り、仏道に入り、治兵衛塚を築き木喰上人（即身成仏）になった、あるいは世をはかなんで商売道具の武具を治兵衛塚に埋めた、などの伝説があり、砂新田にひょうや落雷の害がないのは娘の力など話は展開します。

これらは伝説ですが、彼が寺を建立したという実話があります。幕末に昌平校（湯島の昌平坂学問所）で編纂された武蔵風土記稿の記述では、彼が建立したのは本明寺と言ひ、幕末にはすでに堂宇・住僧なく、本尊も本寺、高松院（川越城内富士見櫓のそば、今の郭町浄水場あたりにあつた）に預けっぱなしだったとのこと。明治以降の発掘調査では、住職であつた僧の骨壺が発見されたとの記録があります。昔は住職がいたという証拠です。

徳川家のほぼ直轄領の状態であつた川越領は幕末、官軍が攻め込み、城内はほとんど破壊され、明治初めの廃仏毀釈運動で高松院も破壊された模様。つまり本明寺のご本尊は高松院に置いてあつたが遅くとも明治初めには廃棄された可能性があります。以上から私は妄想の世界に入ります。次号最終章では政次と娘の悲劇を現実的に辻褄を合わせてもっともらしくお話ししましょう。